



第百三十一號

(第十二卷)

昭和七年三月

### 1931年中に於ける天文学上の進歩

(米國サイエンス・サーボスで撰定せるもの19件)

1. 西曆1866年以來最も盛んなる獅子座流星群が十一月に見えた。次年は更に盛んに見える筈。
2. アメリカ製の最大反射鏡、直徑175糎で、世界第3位のものがパーキンス天文臺のために完成された。ガラス材はワシントン市國立標準局で鑄造され、ピツバグ市フェカソ會社により百萬分の一まで精密に磨かれた。
3. 天體運動の新しいレコードがキルソン山天文臺で發見された。即ち毎秒24000軒づつ地球から退進する微光星霧が双子座に見つかつたのである。
4. ハーワード學院天文臺の發表によれば、マゼラン大星雲は各々が太陽の100倍もある214000個の星を含み、尙ほ其の上に、太陽の15,000,000倍に匹敵する明るさのガス星霧を含むと知れた。
5. 地球へ僅々26100,000軒に近づいた小遊星「エロス」は長い紡錘形であることが南アフリカのジョハネスバグ市ユニオン天文臺で發見された。
6. 日本京都の花山天文臺の「ナカムラ」教授は一月15日に「アンタレス」星が月のために掩蔽されたことを觀測し、其れが單一點像でないことを見つけた。
7. 大熊座 $\xi$ 星は、肉眼では單一星であるけれど、實際は四つの星で、其れが二つづつ二組になつてゐるといふ事が、リク天文臺のパーマン氏によつて

発見された。

8. カナダ領非クトリヤ天文臺のピアス氏は太陽の 184倍も大きい質量の二重星を発見した。

9. 南アフリカのジョハネスバークにあるユニオン天文臺へ出張してゐるライデン大學天文臺のファン・ゲント氏は週期100分時間といふ珍らしい短週期の變光星を発見した。

10. 日食が三つと月食が二つとが此の年中に 起つたけれど、學術上重要なものは一つもなかつた。

11. ヘルソン山天文臺のニコルソン、ファン・マーネン、キリス三氏の研究により、海王星の衛星の質量は、地球に比べて、 $\frac{1}{10}$  乃至  $\frac{4}{100}$  であることが知れた。

12. 太陽黒點は 11年變動の極小期に近づいたので、黒點數は少かつたが、其のため長距離の無線通信は成績が良好となつた。

13. バリ郊外のムドン天文臺にゐるリヨ氏は日食でない時に非常に敏感な器械によつて太陽のコロナを觀測した。

14. アボト氏は二十年間にもわたり 太陽熱と天候との比較研究から將來は天氣の長期豫報が可能であることを發表した。

15. トロント大學のマクレナン、キン・ロバート、アイヤトン三氏はオリオリの高さを測つて僅々80籽乃至120籽であると知つた。

16. カリフォルニアでメロンを養成してゐるアマチュア長田政二氏は小望遠鏡で一彗星を発見し、名を擧げた。

17. スペインのザラゴサ市に居るアマチュア英國人ライヴス氏は肉眼にも見える程の明るい一新彗星を発見した。

18. ニウジミン彗星が地球の近傍へ再歸して來た。之れは土星族の彗星の中で再び現はれたものの二つ目である。

19. 三年四ヶ月毎に太陽の近くへ歸つて來るエンケ彗星が六月21日にアルゼンチン國コルトバ天文臺のボボネ氏に発見された。